

青山学院150年！ ミッショナリー・マインド

学院宗教育部長

伊藤 悟



いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。
これこそ、キリスト・イエスにおいて
神があなたがたに望んでおられることです。

テサロニケの信徒への手紙一、5章16～18節（聖書協会共同訳）

新しく何かを始めるときには勇気と決断が求められます。それを応援して見守ってくれる人も必要です。それに加えてキリスト教では、祈りが大切な働きをすると信じています。自分の計画が実現しますようにと祈ることがあります。一方、他人が自分のために必死で祈ってくれるということもあります。

キリスト教では祈りは、目に見えない神様との対話のときです。青山学院では礼拝の時だけではなく、色々な場面で祈ります。神様と相談するのです。私も目標や計画を立てるのだけれど、同時にそれが神様のご計画であるかどうかを確かめるのです。

青山学院の源流となった最初の学校「女子小学校」。その創立者ドーラ・E・スクーンメーカーは、150年前にメソジスト監督教会の最初の女性宣教師となりました。幼い頃から外国で宣教師になりたいという夢をもっていました。それが現実し始めるとドーラは一気に不安になりました。彼女は何度も神様に祈りました。「本当に私でよいのでしょうか。これは私の思いではなく神様の計画なのでしょう。私はそこに信頼して歩み始めてもよいのでしょうか」。彼女は祈りました。周りの人たちも祈りました。

今年の夏、私はアメリカのイリノイ

州にあるエバンストン第一合同メソジスト教会を訪ねました。この教会は、150年前の1874年9月20日にスクーンメーカーの宣教師派遣式が行われた教会です。その時ドーラは、世界のほかの地域に派遣される宣教師たちと一緒に、不安な面持ちでしたが、神様がお命じになる人生を歩み進むことを誓いました。そして「どうか私のために祈ってください」と人々に言いました。多くの人たちがドーラのために神様に祈りました。母との別れも辛いものでした。しかし神様がそのように示されるなら、そして何が起るかわからないけれど、神様が必要とされる場所、神様が送り込んでくださるところなら、そこに向けて出で立っていく。不安だけど、それは喜びであり名誉なことであると信じていました。ドーラは8歳の時から外国の宣教師になることを夢見ていました。そしてその夢は23歳の時に実現することになります。

青山学院に次々と派遣されてきた宣教師たちもみな同じでした。祈りながら、もしそれが神様の示されることなら、必要とされるどんなところにも出かけていく覚悟がある。この先何が起るのかわからない。けれど、それが神様の召し (calling) であるなら、あるいは私を必要しているところがあるのなら、そこに出かけていく。それを「ミッシヨナリー・マインド」(宣教師の

こころ、心意気、感覚) と言ってもよいでしょう。「サーバントリーダー」でもあります。

青山学院には、このミッシヨナリー・マインドやサーバントリーダー・マインドが150年たった今も漂っているように思います。祈りの中で進むべき道を見出していきます。祈りながら確証を得て、未知の領域への一歩を踏み出していきます。他の人の行かないところ、避けて通るような道や、あえて困難な道を選んでいきます。

青山学院は今年創立150周年を迎えました。これからもミッシヨナリー・マインドを持ち続けたいと思います。サーバントリーダーをさらに育てていきます。いつも喜び、絶えず祈り、すべてのことに感謝する歩みを、青山学院を構成する私たち一人一人がこれからも大切にしていきたいものです。



左：ドーラ・E・スクーンメーカー
右：エバンストン第一合同メソジスト教会